

【解答例】

一

敬愛する友の何気ない言葉によって、自身のことしか考
えていなかった自分の姿に気づいて衝撃を受け、その言
葉が彼の人間の实在性をもって自分の中に定着したから。

二

自分のことだけを考える無邪気さは、他者への感謝や配
慮のない自己中心的なあり方であると気づき、それに無
自覚であった自らの幼さと愚かさを悟ったということ。

三

現実の苦労は知っていても、人間の实在としての世間に
触れておらず、人とのつながりを実感して自分をその中
に位置づけることができていなかったということ。

四

書物の言葉は、反芻されるうちに筆者の個性が薄れ抽象
的意味内容だけが定着するが、生身の人間の言葉は、発
した人間が实在性をもったまま定着し、自分とつながり
ながら自分の一部となったことが強く感じられるから。

五

本当の人間関係とは、自分の人間性に深い洞察を与えた人
間がたとえ死んでも、その言葉を反芻することによってその人が
現実以上に实在性をもって感じられ、自分も相手への理解
をますます深めていくような不思議なつながりだから。

二

一
直撃弾による死は、被害の場所や対象にかかわらず、戦時下においてはありふれた出来事ではなかったから。

二
隣部屋の少女が歌うシャンソンは筆者に安らぎを与えてくれていたが、その少女も多くの日本人と同様、戦争の犠牲になって死に、歌声は消えてしまったということ。

三
明日のこともわからない戦時下にあつて日々を利那的に生きていた筆者は、部屋のすだれ越しに外の風景や事象を見ていたように、世の中で起きるあらゆるものごとに対して距離を置き、冷ややかに眺めていたということ。

四

東京の町中が空襲で焼き尽くされたのに、灰となった筆者の蔵書の中で古今集の一片だけが焼け残っていたという出来事は、いかにも作家のエピソードにふさわしい都合のいい話であり、作り話と言われた方が納得がいくから。

五

戦時中は外の事象から距離を置き、美しい歌声の少女の死の内実にも触れようとせず、戦後に訪れた宿では、すだれ越しに見た藤の花に触れようとしたが手が届かなかった。こうした体験から筆者は、結局、美しいものに直接触れられない自分の運命に思いを巡らせているということ。

一

(1)	朝廷のおとり決め以上に、手厚く伊周様にお仕え申しあげようと思う。
(2)	すぐに参上したいとはいっても、やはり思いどおりには外出できませんので、今まであなた様のもとに参上しておりません。

二

有国は丁重な挨拶やたくさんの進物を伊周に贈ってくるが、かつて有国が父からひどい扱いを受けたことを思うと、何と応えたらよいかわからず、また家来筋であるはずの有国からの施しのようにも思えて居心地悪く思う気持ち。

三

長寿は素晴らしいことであるが、二位が長生きしたせいで、かえって娘に先立たれるという憂き目を見なければならなかったのは、しみじみ気の毒だったということ。

四

母を見舞いに京に戻ったときにこの喪服を身につけていればよかったのに。今思えば、母と生き別れになった日が、そのまま永遠の別れであったのだなあ。
--